

新 潮 文 庫

黄 金 の 日 日

城 山 三 郎 著

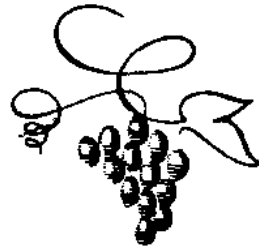


新 潮 社

おう こん ひ び
黄金の日日

新潮文庫

し - 7 - 14



昭和五十七年十二月二十五日 発行
昭和六十一年四月二十五日 二刷

著 者 城 山 三 郎
しろ やま さぶ ろう

発行者 佐 藤 亮 一
さとう りやういち

発行所 株式 会社 新 潮 社
しんそうしゃ

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Saburô Shiroyama 1982 Printed in Japan

ISBN4-10-113314-X C0193

新 潮 文 庫

黄 金 の 日 日

城 山 三 郎 著



新 潮 社 版

2914

黄金の日

一章 雄々しき人々

永禄十一年十月。摂津せつと和泉いずみの国境に在る堺さかいの町は、織田信長の軍勢によって包囲された。海に向かって開いた町は、残り三方に深い堀をめぐらしている。信長の軍は、鉄砲を撃ちこまれるのを警戒してであろう、その堀より少し退いたところに布陣し、夜にはいくつも篝火かがりびの炎を上げていた。

堀の暗い水面には、篝火の灯影ほかげはほとんど届かず、中天にかかる半月の影だけが、無心に浮かんでいる。

町の防備は、嚴重であった。堀を渡る橋には頑丈な木戸があり、堀沿いには、延々と土塁が続く。二町おきぐらに見張りの櫓やぐらも急造されて、人影が堀の外をにらんでいた。土塁ぎわには、鉄砲や弓矢を構えたかなりの人数が、いくつか黒々としたかたまりになって、はりついている。

冷えこんだ夜の空気には、殺気がみなぎっていた。

町の中へ入ると、早々に雨戸を締めている家が多いが、それでも、町の中央、東西に走る湯屋町かいわいに来ると、灯影が漏れ、琉球渡来りゅうきゅうの三味線の音が聞えて来たりする。

町の周囲の緊迫した空気とはちぐはぐだが、そのちぐはぐなものが、町会所の寺院風の大きな建物の中で、はげしい議論となつて、ぶつかり合つていた。

美濃みのから上洛じようらくしてきた織田信長なる武将が、いきなり堺に二万貫の矢銭やせん（軍用金）を課してきた。応じないでいると、軍勢をさし向けてきた。一戦覚悟であくまで拒否するか、それとも、折れて矢銭を出すか。

堺を支配する会合衆えいごうしゆう三十六人の中で、意見は真二つに分れた。

二万貫といえば、大金である。遣明船けんみんせん一隻の運航費が約千五百貫であるから、十隻あまりの船を明国へ往復させることができる。

ただ、堺の町の資力からすれば、払えぬ金ではない。

遣明船のための勘合符かんごうふをもらう請負代が二千貫といわれたところ、堺は三千貫で請負い、さらに四千貫まではずんだ。足利あしかがの公方くほうたちは、こうした金で金閣や銀閣を建てたというのだが、それだけの金を払っても、なお堺はもうけを上げた。日本から銅を持って行って売り、生糸を買つて帰ると、二十五倍の値段になったりした。生糸は極端な例だとしても、遣明船はふつう一万貫程度の荷を積んで行き、三、四倍の利益を上げた。もつとも、難破したり、海賊に襲われて、元も子も失くすことも計算に入れる必要はあるが……。

いずれにせよ、堺にとつての二万貫。大金だが、無理をすれば、ひねり出せる。その辺のところを、たくみに衝ついてふっかけてきた金額であつた。

それだけに、会合衆には、いまいまでもあり、また議論がまとまらぬ結果になつた。

「信長は、これまでのひととちがいます。こわいひとです。新しいひとです。利口なくせに無茶ができます。これまでのように、まわりを見ながら何かやる、というひとではない。突き進んでいきます」

今井宗久そうきゆうは、幾度となく同じ文句をくり返していた。二万貫を出そうという妥協派である。「近江源氏の血をひくというのに、弱気なことを」

茶友達である天王寺屋宗及あたりにからかわれても、同じ言葉をくり返した。

宗久は、近江高島から亡命してきた侍の子で、堺に出て、皮革・鉄砲などを扱って成功した新興商人であった。茶湯にも明るく、武野紹鷗じゅうおうの女婿じよせに迎えられたほどだが、豪商としてはまだ発言に重みがない。むきになっていえば、いよいよ座の空気から浮く結果になった。

議論を牛耳っているのは、紅屋・能登屋のとうなど屈指の豪商たちの唱える「信長何するものぞ」という強硬論であった。

戦乱続きの世というのに、この町だけが、二百五十年近く、兵火を知らない。平和に狎なれていた。

牢人ろうにんたちを集め、若衆を武装させ、雑賀さいがからは鉄砲の名手をひきぬくなど、町にそれなりの兵力を持っているということもある。

だが、それ以上に大きいのは、永年培ってきた町の経済力・政治力であった。黄金の力が、武将たちに一目置かせてきた。

諸侯にとって、堺はかけがえのない物資の調達先であり、ときに軍資金の借用先でもあった。

蹂躪するより、友好を求めた。

堺としても、表向きは局外中立を貫き、どの政治勢力にも積極的に加担しないことを建前にした。このため、軍隊の市中通行は認めても、数多い寺院を使つての市内での宿泊は許さぬしきたりであつた。

堺は、さらに進んで、武將たちの争いの調停者になり、諸侯を手玉にとることさえあつた。二年前、松永久秀が堺に逃げこみ、追撃してきた三好勢との間に戦鬪が開かれようとしたとき、会合衆が両者に働きかけ、それぞれに応分の金を与えたあげく、優勢な三好勢が勝つたことにし、高らかに勝鬨の声だけ上げさせて、引き揚げさせた――。

堺とは、そういう町である。田舎出の一武將が、縁もゆかりもないのに、いきなり大金を巻き上げられるような町ではない。

「堺を見そこなうな」というのが、強硬派の意見である。

今井宗久は反論した。

「縁もゆかりもないわけではありません。信長は堺の代官職を求めています。他のどの恩賞にも目もくれず、堺の名をあげたというのは、堺へのひたむきな執念、信長というひとの新しさおそろしさのあらわれではありませんか」

上洛して足利義昭を將軍にした信長に、義昭は褒賞として、副將軍か管領の地位、あるいは、近江・山城・摂津・和泉・河内の五ヶ国で領地をふやさせようといったのに対し、信長は、堺・大津・草津の三ヶ所に代官を置くことだけを望んだ。

つまり、信長は、これまでの諸侯のように、成り行きや事のついでに、堺に大金をふっかけてきたのではない。堺そのものに、はじめから照準を当ててきている。

宗久の熱弁に、強硬論者はいい返す。

「それほど堺を望むなら、然るべく敬意を払うべきだ。いきなり頭ごなしに大金を出せとは、何事であるか。堺衆の誇りにかけて許すわけには行かない」
うなづく顔が多い。

会合衆の中には、倉庫業を意味する「納屋^{なや}」を名のったり、屋号とする者が、幾人もいる。新興の今井宗久もそうだが、その茶湯仲間である千利休^{せんりのきゆう}も、納屋を名のる。その納屋こと千利休は、判断がつきかねて、黙りこんだままである。黙っていることは、大勢に加担することであつた。

「信長のことをよく知らぬと、とり返しのかねことになります」
宗久は、悲鳴のような声を上げ続けた。そして、ときどき落着きを失くした様子で町会所の入口を見る。

「おびえることはない。ここは堺だ。堺は格別の町なんだ」

天王寺屋が、また冷ややかにいう。

宗久は下唇を噛^かんだ。おびえているのではない。宗久は報^{しら}せを待っていた。信長についての少しでも新しい報せ、みなを恐れさせる報せを。

町会所のすぐ先、湯屋町と市町の角に、番所があった。

ふだんは腕の立つ番人たちが詰めて居るが、いまは前線に出て、代りに、身なりもまちまち、少し異形の若者たち数人がたむろしていた。

彼等も報せを待っていた。いや、正確には、報せを持った一人の仲間の帰りを待っていた。

「おそいな。五右衛門のやつ、織田の軍勢にとつかまつたのかな」

「あのどじめ。また南蛮酒に手でも出したのでは」

「田舎者の軍勢に、そんな酒があるものか」

「わからぬ。信長は、なかなかの南蛮好みというからな」

「しかし、腰の抜けるまでのめば、見つかったとき首がとぶ。今井家で盗み酒するのとはちがうからな」

仲間たちのその声に、今井宗薫はにがい顔でそっぽを向いた。

父親の宗久に似て、色白でよく動く目、大きな福耳。女のようなおちよぽ口だが、利かぬ気を見せて、そのうすい唇を強く結んでいる。恰幅もよく、あと一回り肉をつけ、髪を銀色にすれば、そのまま宗久になってしまう。

その宗薫が今井家の惣領息子なら、宗薫の隣りに居る助左衛門は、今井家に拾われて育った小僧の身である。骨組のがっしりした男で、眉が濃い。笑顔はさわやかだが、その話題には、閉口した表情でもある。

一月ほど前の夜ふけのことである。今井家の奥の客間に忍びこんだ石川五右衛門が、ギヤマ

ン壺に入っていた葡萄酒を盗みのみした。

次の間にいつも宿直代りに寝ていた助左衛門が目をさましたときには、五右衛門はすっかり酔いが回って、動けなくなっていた。

赤い顔をして両手を泳がすだけの五右衛門を見て、助左衛門は怒るよりも、笑い出した。それに、南蛮酒がうまいと吹聴していた手前、助左衛門にも責任がある。

「どじな泥棒め」

と、耳に口つけて叱りながら、五右衛門をひきずるようにして廊下から庭へ逃がそうとしたとき、やはり目をさましてやってきた宗薫に見つかった。

とっさに、助左衛門は、五右衛門をかばい、嘘をついた。

「わたしが、こっそりひき入れて、のませました。いかようにも、お仕置きを」

番所に引き渡され、月番の会合衆の手で裁かれる。あるいは、暇を出されるのも覚悟したのだが、宗薫はよく動く目で二人を見改めたあと、

「そうかい。ずいぶん、にがい酒だったろうな」

とだけいって、姿を消した。

この件について、宗薫も助左衛門も一切口外しなかったのだが、当の五右衛門がしゃべって仲間に漏れた。盗っ人を見逃したとあっては、助左衛門はもちろん、宗薫の立場もなくなるのだが、その辺までは頭の回らぬ五右衛門であった。

ふいに軽やかな鐘の音が聞えた。

若者たちは、いっせいにその方角を見た。二つほどの灯影が、空に漂うようにまたたいていく。

同じ市町の道ひとつ隔てたところに、日比屋了慶の三階建ての大きな家がある。海賊と戦うため三百人の武装兵を持つような豪商だが、その三階を天主堂に供していた。京都を追われたポルトガル人宣教師たちが居ついて、すでに四年あまりになる。

「切支丹は、こんな夜までおつとめをしているのか」

かぶき者仲間の中でも格別目立つ僧形の善住坊が、大きな目をつり上げていった。雑賀鉄砲衆からの流れ者で、若いが、狙撃にかけては名手である。話の合い間も、手は鉄砲の銃身を見がき続ける。

「美緒から聞いたが、今夜は、町の安泰を祈る特別の弥撒があるそうだ」
いいながら、宗薫は腰を浮かせた。

「おれは帰る。五右衛門はあてにならぬ。あいつの持ってくる報せなんて、知れたものだ」
つぶやいたあと、助左衛門に向かい、

「もし、あいつが帰ったら、ともかく父のところへ連れて行け」

宗薫が立ち去るのとほとんど同時に、日比屋の表戸が開いて、三十人ほどの男女が出てきた。宣教師であろう、長身の男にあいさつしながら散って行く。

その中に、黒い布で半ば顔をかくし、侍女を伴に、小走りに消える美しい娘があった。今井

宗久の後妻の連れ子、美緒である。父親は堺に逃げのびた公家の一人だという。

「宗薫め、同じ家に居ながら、また顔が見たくて帰ったのか」

若者仲間ではずばぬけて年長というか、一人だけ壮年の山上宗二が、にがにがしそうにつぶやいた。「平家蟹」^{へいけがに}のあだ名のある角ばったいかつい顔。仲間のうちでは、いつもいちばん辛辣な口をきく。大店の若旦那^{おわたな}だが、利休について茶に親しみ、店のことはふり向きもしない。

「仕様があるまい。今井の家では、行く行くは二人を夫婦にする、というもの」
鉄砲をみがきながら善住坊がいったとたん、助左衛門が大声を出した。

「そんなこと、きまつているものか」

「なんだ、助左、おまえも……」

「おれだけじゃない。五右衛門だって」

山上が、鼻先で笑っている。

「堺の若衆は、みんな惚^ほれているのさ」

そうした話題から逃げ出すように、助左衛門は鉄砲をとり上げ、肩に当てた。善住坊について使い方は習っている。これだと思うものについては、格別の勉強をする助左衛門である。

鋭く狙いをつけたつもりでいると、また山上に冷やかされた。

「目つきがちがうな。おぬしのは、さて当るかどうか、という目。善住坊のは、撃ち殺して見せるといふ目だ。善住坊がそいつを構えると、とたんに死人のにおいが漂ってくる」

ふいに、その言葉を受けて、黒い影が舞いこんできた。

「死人のにおいは、つい、そこまで来ている」

石川五右衛門であつた。

助左衛門は、すぐ五右衛門を連れて町会所へ行き、今井宗久に報告させた。

駿足しゅんそくの五右衛門は、ふだんは、豪商の飛脚代りや使い走りをしているが、もともと伊賀衆に
つながりのあるところから、情報を集めて回る才能もあつた。

ただ、この夜五右衛門のもたらした情報には、五右衛門自身では、これはと思うものはなかつた。

信長の軍隊はかなりの人数で堺を包囲し、なお、後詰めご詰めの軍が続いている。信長そのひとは、
摂津芥川城あきたがわに入つて、一服。芥川城を預かるのは、和田惟政これまさき麾下の高山飛騨守ひだのかみ・右近の父子
である。

信長は、堺の他に、石山本願寺へ五千貫、大和法隆寺やまとに一千貫を課していたが、その両寺と
も、信長の要求に従つて、制札銭代りせいさつせんに納めることにした、という。事実、法隆寺からは、そ
の金かねをつくるためであらう、堺へ大量の米を売りにきていた。

京都では、大どころの社寺のいくつかが、別に信長にいわれたわけでもないのに、あわてて
制札銭を差し出した。軍隊の立ち入りを免れる禁制札をもらうためである。かなりの大金を出
したらしく、そのために、天竜寺あたりでは、寺の手持ちの金だけで足りず、愛宕山あたごなど洛外
の社寺から高利を払つて賽銭さいせんを借り出した。

ところが、京都に入つた信長の軍隊は、これまでのところ、規律が厳正で、あまり乱暴の様子がない。京雀^{きやうすずめ}たちはむしろ拍子抜けしている、という――。

「この程度の話なんで」

と面目なさそうな五右衛門に、宗久は五貫文の礼金を渡した。大金であつた。銭一貫あれば、米一石が楽に買える。

五右衛門は目をみはつたが、番所に戻ると、若者たちがまた目をまるくした。いや、五右衛門自身がまだ信じられぬ顔つきで、

「戦場で命がけて落武者の首ひとつとってきて、一貫。一つとっては、引き返して藪^{やぶ}にひそむ。じつと次のを待って、もうひとつ。三つも腰にぶらさげたら、重くて動けなくなる。それを五つもとってきた金^{かね}だ」

「せいぜい禪^{ふん}ぐらいしかはがしたことがないくせに、いかにもやったようなことをいう」と、山上にいわれて、五右衛門は首をすくめた。

落武者狩りは、百姓にとって金になる仕事。ただ、五右衛門は、これまでのところ、いつも気おくれして、首や鎧^{よろい}がとられたあとの死体から、肌着ぐらいをせしめてくるが多かつた。それまで黙っていた善住坊が、ふいに鉄砲を構えると、つぶやいた。

「名のある侍なら、首ひとつ十貫だ」

そうした首ばかり狙うという目つきである。助左衛門は、善住坊のそういうところが好きであつた。善住坊に鉄砲を習うだけでなく、その根性を学びたい。